

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：12602

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K22746

研究課題名(和文)高齢者ケアにおけるクリエイティビティ評価尺度の開発：組織のマグネティズムの創出

研究課題名(英文) Development of a Creativity Scale in Elderly Care to Create Organization Magnetism

研究代表者

緒方 泰子(Ogata, Yasuko)

東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・教授

研究者番号：60361416

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,900,000円

研究成果の概要(和文)：研究目的は、看護師等のケア実践者が、高齢者へのケア実践において発揮している創意・工夫(クリエイティビティ：CR)の評価尺度を開発することであった。CRとは「発見する力や発見を価値の創造につなげる力のようなもの」とした。COVID-19の感染流行状況を注視しながら研究方法を再考し、3つの質問紙調査を実施した。対象は、グループホーム、特別養護老人ホーム、訪問看護ステーションのケア実践者であった。CRに関する自由記述を質的に整理し、The Person-centered Care Assessment Tool (P-CAT)日本語版、2因子より成るCR質問群を開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通じ、高齢者ケア実践者のCRを表す項目群や、CRの関連概念の日本語版尺度を開発できた。CRを測定できることで、実践に埋もれているCRやCRを発揮しているケア実践者を見いだすことが可能となり、CRの発揮につながる職場環境・組織特性を明らかにできる。また、CRと職務満足度や離職意向等との関連を検証できる。本研究成果は、CRを発揮できるような、実践者にとって魅力的な職場環境の創成(マグネティズムの創出)に貢献する。

研究成果の概要(英文)：The study is to develop a scale that measures creativity (CR) of nurses and other care practitioners demonstrated in their elderly care practices. CR is defined as "competency to discover and ability to generate values from the discoveries." The research methodology followed COVID-19 pandemic restrictions especially restrictions towards the elderly population. We conducted surveys using three types of questionnaires. The Japanese version of the Person-centered Care Assessment Tool (P-CAT) and a set of CR questions based on two factors were newly developed. The surveys were conducted among healthcare/care practitioners in group homes, nursing homes (special nursing homes), and home health care agencies. Free-responses regarding CR from the surveys were qualitatively analyzed.

研究分野：看護管理、マネジメント

キーワード：クリエイティビティ 高齢者ケア 職場環境 労働力 尺度開発

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

高齢化の進展や労働力低下が予測される中、高齢者ケアを支える介護・看護等のケア実践者(実践者)の確保は喫緊の課題である。介護労働の状況は一貫して離職率が高く、賃金が低く、従業員不足感が高い。しかし同じ労働条件であっても、創意・工夫をして新たな価値を生み出し(クリエイティブティの発揮) 仕事を楽しみながら働き続ける実践者がいる。こうした事象は、どのような職場環境・組織特性によりもたらされるのか。将来の実践者確保に向け、実践者を磁石のようにひきつける魅力的な職場環境(マグネティズム)の実現が求められる。

2. 研究の目的

(1)研究目的は、以下の2点である。

高齢者ケアに従事する介護職や看護職等のケア実践者が、高齢者へのケア実践において発揮している創意・工夫をクリエイティブティ(CR)とし、CR評価尺度を開発する。

CRと就業継続意向等との関連を検証し、CRを発揮しているケア実践者や組織の特性を明らかにする。

明らかになった組織特性の実現により、魅力ある職場環境を創成し実践者確保に寄与することを目指す。

(2) [CR]・[CR行動]

本研究では、CRを、仮に「独創性や創造性であり、価値創造に向かう性質や能力のこと」と定義する。外部からは見えないため、CRを発揮している行動(CR行動)で把握する。CR行動は、高齢者ケアにおいて、A: 何らかの現象に新たに気づく・発見する、B: Aを新たな価値へ転換する、ケア実践の価値を創出する、喜びを感じる等である。

AやBに至るCRを、各々CR1、CR2とする(図1)。本研究では、CR・CR行動の発現を高める高齢者ケア組織の職場環境・組織特性を解明することを目指す。

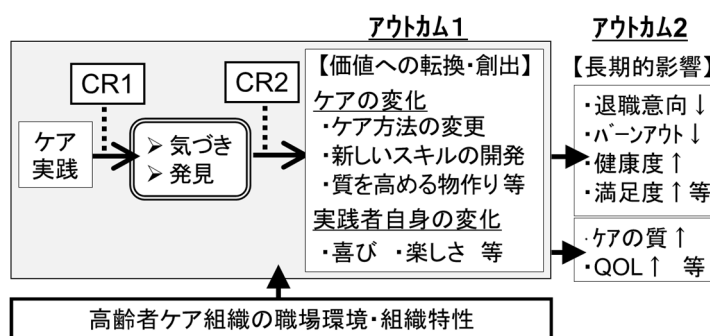


図1 CR1・CR2と、アウトカム1・2との関連 (申請時の概念図)

3. 研究の方法

本研究では、インタビューや観察、先行研究による知見の検討を通じてCR等を定義して、CR行動を抽出し、CR行動を評価する尺度を開発する計画をたてていた。研究目的を達成するには、高齢者ケアを支える介護職や看護職等による日々の業務における創意・工夫、即ちCR行動を見つけ出す必要があるため、研究者が高齢者ケアの現場に行き、実践されているケアを観察する予定であった。しかし、2020年のCOVID-19パンデミック以降、感染しやすい高齢者のいる施設等に行くことができない状況が続いた。そのため、COVID-19流行状況を注視しながら、感染症流行下でも実施可能な研究方法を再検討し、以下のような3つの質問紙調査を実施した。

(1)グループホームにおけるCRに関する調査

対象

東京都内の全てのグループホーム(GH)650カ所働く、施設管理者1名と認知症ケア経験1年以上の介護職または看護職1名。看護職のいるGHには、看護職に回答を依頼した。

方法・調査内容

無記名自記式質問紙調査(調査期間:2019年9~10月)。質問紙に回答後、回答者ごとに返信用封筒に封入し研究者宛に直接郵送してもらった。調査内容は、日本語に翻訳したパーソン・センタード・ケアの評価ツールであるThe Person-centered Care Assessment Tool(P-CAT)の質問、人生最終段階におけるケア(看取り)におけるGH職員の創意工夫・困難感(自由記載)など。パーソン・センタード・ケアとは、認知症のある方を一人の「人」として尊重し、その人の尊厳に配慮したケアを行おうとする認知症ケアの考え方である。P-CATの開発者である豪州の研究者の協力を得て翻訳し、本調査でも同研究者より助言・協力を得た。

回答数

回答した介護職または看護職は158人(回答率:12.2%)、有効回答は149人であった(有効回答率11.5%)。このうち、人生最終段階におけるケア(看取り)におけるグループホーム職員の創意工夫・困難感(自由記載)への回答したのは105人であった。

倫理的配慮

調査は、研究代表者の所属組織における倫理審査委員会の承認後に行った。

(2)特別養護老人ホーム（特養）における CR に関する調査

対象

全国の特別養護老人ホーム（特養）8,097 施設から 2,000 施設を層化無作為抽出し、認知症ケア経験 1 年以上の介護職または看護職（各施設 1 名）を対象とした。

方法・質問内容

無記名自記式質問紙調査を行った（研究自粛期間終了後、2020 年 9～10 月）。質問紙に回答後、回答者ごとに返信用封筒に封入し研究者宛に直接郵送してもらった。調査内容として、回答者属性、職場への満足度、ケアの質、日本語に翻訳した The Person-centered Care Assessment Tool (P-CAT)の質問、ケアに関する創意工夫として「利用者本人が穏やかに過ごすためにどのような創意工夫を行っているか（自由記載）」などを尋ねた。本調査でも、P-CAT の開発者である豪州の研究者から助言や協力を得た。

回答数

2,000 か所に 2,000 人分の質問紙を配布し、340 人（回答率 17.0%）から回答があった。

倫理的配慮

調査は、研究代表者の所属組織における倫理審査委員会の承認後に行った。

(3)訪問看護ステーションにおける CR に関する調査

対象

全国から無作為抽出した訪問看護ステーション 2,000 か所に調査協力を依頼し、参加意思を表明した訪問看護ステーション 153 か所で働く、看護職者・理学療法士・作業療法士等の医療職スタッフ 1,363 人。

方法・質問内容

無記名自記式質問紙を訪問看護事業所に送付し、医療職スタッフに配布してもらった（2023 年 7～10 月）。各回答者は、質問紙に回答後、返信用封筒に封入し個別に研究者宛に直接郵送してもらった。調査内容として、回答者属性、CR に関する質問、訪問看護ステーションの実践環境（職場環境特性）に関する項目、職場への満足度、就業継続意向、ケアに関する創意工夫として「認知症者がケアを拒否した際に工夫していること（自由記載）」などを尋ねた。

回答数

510 人の看護職者・理学療法士・作業療法士等の医療職スタッフより回答があった。うち自由記載への回答者は 292 人であった

倫理的配慮

調査は、研究代表者の所属組織における倫理審査委員会の承認後に行った。

※分析方法：調査(1)(2)(3)いずれにおいても、量的分析では、記述統計算出後、研究目的に応じた解析を実施した。自由記載については質的分析を行い、回答された記述をもとにコード化し、更に内容の類似性と相違性にもとづいて《サブカテゴリ》や【カテゴリ】へと抽象化して概念を抽出した。

4. 研究成果

(1)グループホームにおける CR に関する調査結果

回答者属性

回答者の平均年齢は 47.7 歳、高齢者ケアの経験年数は平均 10.8 年、事業所勤務年数は平均 6.2 年であった。回答者の約 80%が介護福祉士資格を有していた。

量的分析結果

P-CAT 日本語版の信頼性と妥当性を確認するため、各項目の項目間相関と I-T 分析を実施後、探索的因子分析を行った。その結果、2 因子（ケアの個別性の質、組織的・環境的サポートの量）9 項目の構造が確認された。更に確認的因子分析（Confirmatory Factor Analysis：CFA）を行い、適合度指標は、GFI = 0.961、AGFI = 0.933、CFI = 0.994、RMSEA = 0.019 であった。尺度全体のクロンバック α 係数は 0.756、下位因子別では 0.692 と 0.699 であった。

質的分析結果

人生最終段階におけるケア（看取り）におけるグループホーム職員の創意工夫・困難感（自由記載）への回答者 105 人の属性は、平均年齢：47.5 歳、高齢者ケア経験：平均 11.0 年、現事業所の勤務年数：平均 6.2 年であった。人生最終段階におけるケア（看取り）における創意工夫（CR）として、GH 職員は、《本人の生活に対する希望を聞く》《ケアの押し付けをしないようにする》《本人の好きなものを利用する》《家族との繋がりを感じられる環境を整える》ことで【その人の望む生活を支援する】ことを目指していた。【その人にとって心地よい環境を整える】こと、【スタッフの精神的負担を軽減する】こと等にも取り組んでいた。（註：《 》サブカテゴリ、【 】カテゴリ。）

(2)特養における CR に関する調査結果

回答者属性

回答者は、男性 51.9%、平均年齢 44.6 歳、認知症ケア経験年数は平均 14.1 年、職種は介護福祉士 58.0%、看護師 21.6%等であった。

量的分析結果

P-CAT の得点は平均 43.6 で、尺度全体の α 係数は 0.81 であった。原版と同じ構造であるかどうかについて構成概念妥当性を確認するため確認的因子分析 (CFA) を行ったところ、項目間で誤差変数間の調整を行ったモデルの適合度は、CFI=0.89、RMSEA=0.07 であった。P-CAT の得点との偏相関係数は、職場への満足度 ($r=0.47$)、ケアの質 ($r=0.54$) であり、Person-centered Care 実施状況 ($r=0.67$) であった。

質的分析結果

自由記載への回答者の職種は、介護職、看護師、介護支援専門員などであった。「最期の時を穏やかに過ごすとはどういう状態か」「それを支えるための職員の創意工夫」などについて質的に分析した所、特養のケア実践者が考える「最期の時の穏やかさ」として 6 つのカテゴリが抽出された。以下、【 】には穏やかさのカテゴリを、 には、それを支えていると考えられる創意工夫を示す。例えば、【いつも通りである】は馴染みのある環境の中で過ごすことであり、そのための創意工夫として 不必要な医療は行わない 等があった。【身を委ねられる】は心配することなく誰かに自分のことを任せられるという状態であり、安心できる関係性を構築する 等があった。【人生を慈しむ】はこれで良かったと自分の人生を受け入れられることであり、 人生を振り返れるようにする 等があった。

(3)訪問看護ステーションにおける CR に関する調査結果

回答者属性

回答者は、女性 85.1%、常勤 79.8%であり、職種は、看護師 81.4%、理学療法士 10.2%、作業療法士 4.5%などであった。回答者には管理者 (所長) 19.2%が含まれた。

量的分析結果

CR に関する質問を構成する因子を量的に分析した結果、設定した質問は、「創造性の発揮(仮)」「内発的モチベーション(仮)」の 2 因子で構成された。

質的分析結果

自由記載への回答者 292 人は、女性 256 人(87.7%)、平均年齢 45.5 歳、専門職としての平均経験年数 19.5 年、保有する資格は、看護師 247 人 (84.6%)、保健師 23 人(7.9%)、ケアマネージャー 23 人(7.9%)であった。「認知症の方がケアを拒否した際にケアを受け入れてもらうために工夫していること」への記述を質的に分析した結果、認知症の方がケアを拒否した際にケアを受け入れてもらうために工夫 (CR) として、[導入] [導入からケア中] と [ケア中] [土台] の 3 つのフェーズに 7 つの工夫の【カテゴリ】があった。各フェーズには、例えば、[導入] では、ケアから一旦離れて本人が受け入れられるタイミングを伺う【本人の気持ちをリセットする】工夫が行われており、[導入からケア中] と [ケア中] のフェーズでは、声かけや快へのアプローチを行い【本人の受け入れの状態を保つ】工夫がなされていた。また [土台] のフェーズでは、関わりを継続するために【本人の心を閉ざさない】、ケアの目標や視点を改め【支援者の考え方を変える】などの工夫が行われていた。

(4)研究の限界と展望

本研究では、COVID-19 パンデミックの影響を受け、研究方法を再検討する必要があり、当初計画していた、高齢者ケアの現場に向いて介護職や看護職等が行っている創意・工夫の観察を行うことができなかった。この点は本研究の限界の一つである。一方、感染症流行下でも実施可能な研究方法へと研究方法を修正することで、質問紙調査を通じて、介護職や看護職等の高齢者ケア実践者による CR に関する創意・工夫の内容を質的にとらえることができ、CR に関する質問群を開発できた。これらの研究成果により、高齢者ケア実践者の CR の発揮につながるような、職場環境特性を明らかにしていくことが可能となった。この点は、本研究の研究成果の重要な意義の一つである。

今後、この研究成果を活用し、CR を発揮しているケア実践者や組織の特性を明らかにしていく必要がある。これらの研究で明らかになった、高齢者ケアの実践者が CR を発揮できるような職場環境・組織特性を実現していくことは、高齢者ケア実践者にとって魅力ある職場環境の実現でもあり、必要なケア実践者確保につながる可能性が高い。高齢者ケア実践者にとって魅力ある職場環境の実現は、組織に、介護職や看護職等を惹きつけるマグネティズムを創成することにもなる。また、高齢者ケア実践者が CR を発揮できることは、高齢者ケアの質にも影響し、ケアの受け手である高齢者の QOL (Quality of life) や、ウェルビーイング (Well-being) 向上にも寄与することが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Yumoto, Y., Hiroyama, N., Sasaki, M., Fujinami, K., Otsuka, S., Togari, T., Edvardsson, D., Ogata, Y.	4. 巻 22
2. 論文標題 Reliability and validity of the Japanese version of the Person Centered Care Assessment Tool	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Geriatrics & Gerontology International	6. 最初と最後の頁 344-349
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ggi.14349	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Seira Takada, Yasuko Ogata, Yoshie Yumoto, Masaomi Ikeda.	4. 巻 10(1)
2. 論文標題 Implementation of an Advance Care Planning Inventory and Its Possible Effect on Quality of Dying: A Nationwide Cross-Sectional Study in Group Homes for Persons with Dementia in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Healthcare	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/healthcare10010062	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yasuko Ogata, Keiko Fujinami, Sakiko Itoh, Masayo Kashiwagi, Nobuko Lapreziosa, Yuki Yonekura	4. 巻 8(6)
2. 論文標題 Developing the nursing practice environment scale for home health care: A trial study in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Nursing Open	6. 最初と最後の頁 3593-3605
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/nop2.909	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 松井才紀、湯本淑江、前田優貴乃、高田聖果、緒方泰子
2. 発表標題 認知症高齢者のACPを行う上での困難と、本人の意思を反映させるための対応・工夫
3. 学会等名 第28回日本老年看護学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Seira Takada, Yasuko Ogata, Yoshie Yumoto
2. 発表標題 Advance Care Planning in Group Homes for Persons with Dementia in Japan: Survey of Actual Practices
3. 学会等名 22nd World Congress of Gerontology and Geriatrics (IAGG 2022) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kana Sasai, Yasuko Ogata, Yoshie Yumoto, George Kernohna
2. 発表標題 Outcomes of intergenerational programs between institutionalized older people and children: A scoping review
3. 学会等名 24th East Asian Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高田聖果, 緒方泰子, 湯本淑江, ラプレツィオーサ伸子
2. 発表標題 日本語版 The Quality of Dying in Long-Term Care(QOD-LTC) の開発
3. 学会等名 第21回東邦大学看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大塚咲紀, 廣山奈津子, 湯本淑江, 佐々木美樹, 藤波景子, 伊藤絢乃, 緒方泰子
2. 発表標題 The Person-centered Care Assessment Tool (P-CAT) 日本語版の信頼性・妥当性の検討 —特別養護老人ホームを対象に—
3. 学会等名 日本老年看護学会第26回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 増田梨夏, 廣山奈津子, 西川裕理, 湯本淑江, 緒方泰子
2. 発表標題 高齢者の最期の時の緊急搬送の現状と最期の穏やかさとそれを支える職員による創意工夫 —特別養護老人ホームの職員を対象とした郵送調査—
3. 学会等名 日本老年看護学会第26回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山崎あかり, 佐々木美樹, 藤波景子, 伊藤絢乃, 湯本淑江, David Edvardsson, 緒方泰子
2. 発表標題 The Person-centered Care Assessment Tool (P-CAT) 日本語版の信頼性・妥当性の検討
3. 学会等名 第58回日本医療・病院管理学会学術総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 寺島遥香, 笹井佳奈, 高田聖果, 藤波景子, 湯本淑江, 緒方泰子
2. 発表標題 人生最終段階におけるケア（看取り）に対するグループホーム職員の創意工夫・困難感
3. 学会等名 日本看護評価学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	佐々木 美樹 (Sasaki Miki) (40389713)	東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・准教授 (12602)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	湯本 淑江 (Yumoto Yoshie) (00755184)	東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・助教 (12602)	
研究協力者	廣山 奈津子 (Hiroyama Natsuko) (00733081)	東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・助教 (12602)	
研究協力者	藤波 景子 (Fujinami Keiko) (20882963)	東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・非常勤講師 (12602)	
研究協力者	高田 聖果 (Takada Seira) (30932917)	東邦大学・看護学部・助教 (32661)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	Ulster University			
米国	Jefferson Health Home Care and Hospice			
オーストラリア	La Trobe University			